

認知症患者との関わりについて

認知症の患者さんとはこれまでも多く関わってきたが、新人指導をするようになり改めて関わり方が難しいと思った事例を振り返ろうと思う。

出勤時に病棟へ入ってくると、オープン床から「やめろー！」と大きな声が響いていた。最初はどの患者さんが声をあげているのかわからないまま担当患者を確認し情報収集についた。声が響き渡るカーテンが閉まった部屋番号を確認すると、私と新人看護師Bさんが担当するAさんがいる部屋であった。どうやら夜勤者が口腔ケアをしており、それに対する抵抗で声をあげている様子であった。私は、口腔ケアでここまで声をあげているのに今から清潔ケアを行えるのだろうかかと不安になった。記録を読み進めると、Aさんは抵抗のために看護師に対して手を上げることもあり、両上肢安全帯を装着しながら対応、またはスタッフ数名で押さえながら対応していた。ますますAさんとどのように関わっていけばよいか、またBさんへの指導も含めて私は不安が募るまま引き継ぎへと向かった。

引き継ぎと挨拶のためAさんの部屋を訪室すると、視線は合わず看護師の声は全く届いていない印象であった。抵抗した後のためか髪は乱れており、よく見ると手足の爪も長かった。夜勤者は片付けをしながら2人がかりでAさんの両腕に安全帯を装着しているところであった。ぱっと見ると、容姿も整わないまま両腕を身体拘束されており痛々しい感じがした。ただ、抵抗が強いのであればAさんと看護師の双方を傷つけないためにも、身体拘束は必要なのだろうと思いながら仕事を始めた。



案の定、清潔ケア時は布団をさわろうとただけで大声をあげ、足をばたつかせるなどの抵抗をしていた。更衣を始めた時点で、腕をつねることや引っ掻く動作もみられ、Bさんと避けながらもケアを行うことに必死で、その時は声かけなど忘れ、とにかく早く終わらせようと思っていた。清潔ケアが終わった段階でAさんも疲れた様子が見えたため、手浴や爪切りは一旦見送り、側で見守りを開始することとした。

見守りをしながら一度清潔ケアの実施場面を振り返り、私はAさんに対して丁寧な声かけを行うことができていなかったと気づいた。また、抵抗を避けることに必死で、露出を最小限にすることも意識できていたかと言われると曖昧であったと思う。Aさんの場合は、布団や服を脱ぐタイミングで抵抗が激しくなったため、もしかすると羞恥心が強い人であったのではないかと考えた。強い抵抗があったとしても、いつも通りの声かけとプライバシーの保護は大切だと考え、次回手浴や爪切りは声かけを意識していこうとBさんと振り返り、手浴をすることとした。



Aさんも少し疲労感があるのか、清拭の時と比べ活気はなくなっていた。Bさんと振り返ったことを活かして、手浴の時は手を撫でるなどのタッチングを含め、先程より耳に届きやすいようにゆっくりと声をかけることを意識しながら手浴をした。温かいお湯が気持ち良かったのか、激しい抵抗は見られず爪切りまですることができた。もともとの認知症もあり、意思疎通を図ることは難しかったが、清拭の時と比べると落ち着いており、精神安寧を図れたのではないかと感じた。その後も、声をあげることは何度かあったが、看護師で押さえつけなければならないような激しい抵抗は見られず、両上肢安全帯を着用することなく見守りで対応することができた。

勤務終了前にBさんと、「今までは安全帯を使用しながら清潔ケアをしたり、数人がかりで処置を行ったりしていたので、常に安全帯を着けておいた方がいいという気持ちがあった。でも実際は側で見守れる時は安全帯を着けなかったし、一部の清潔ケアではそこまで抵抗もなくて良かった。」と振り返ることができた。穏やかに手浴や爪切りができたことに関して、疲労によるものも一因として考えられるが、気持ちが和らぐような接し方ができたのも一つの要因として考えられる。入室時は

髪も乱れ両腕を身体拘束されている状態であった A さんが、勤務終了時には両上肢安全帯を解除し、可能な限り身なりを整えることができたため、清拭後に一度振り返る時間を設け反省点を次の行動に活かすことができたのが良かったと思う。

A さんの安全を守るためには、身体行動制限をせざるを得ない時はあると思う。ただ、可能な限りは安全帯を外してあげたいという気持ちもあり、前の勤務者が安全帯を着用していたから、着けるのが当たり前という考えになるのではなく、その都度必要性をアセスメントして、安全帯を解除する時間を少しでも確保できるようにアプローチしていくことが大切だと思った。また、認知症のため意思疎通困難な患者であっても、声の大きさや声質、抵抗がある患者であればその度合にもよって、実施したケアの評価はできると考える。コミュニケーションをとることが難しいと思う場面もあるが、患者のそういった雰囲気も汲み取って関わっていくことが大切だと思う。以前に比べると、安全帯を使用することに関してあまり抵抗を持たなくなってしまう自分がいたが、今回の事例で B さんと振り返ることによって、身体行動制限を実施する意味や必要性を再度確認していくことの重要性を改めて感じた。今後、身体行動制限を実施する場合には、本当に必要性があるのかを考えること、ケアに対して抵抗する患者であったとしても羞恥心を配慮した清潔ケアの基本を忘れずにしていこうと思った。